

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会 2023—報告資料集



吉原遺跡 方形周溝墓群



吉原遺跡 須恵器蔵骨器(奈良時代)

- 「美浜町吉原遺跡の発掘調査
—県下初！石積みをもつ方形周溝墓群—」
- 「和田岩坪遺跡の発掘調査
—弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路の調査—」
- 「太田城水攻め堤の土取り跡
—太田・黒田遺跡第101次調査を中心として—」
- 「中城跡、城の段遺跡の発掘調査について」
- 「名手役所の復旧整備と旧竹房神社本殿の保存修理
—紀の川市の建造物事業を通してわかったこと—」

令和5年11月12日（日）

主催：公益財団法人 和歌山県文化財センター

会場：紀の川市歴史民俗資料館

開催にあたって

『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会 2023－』は、文化財に対して共通の理解と知識を育んでいただき、県内の発掘調査の成果等を県内の文化財担当者が報告し、その成果をいち早く県民の皆様へ提供することを目的として企画しました。和歌山県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者との連携し、第1回目を平成18年度に開催して以来、今年で18回目を迎えることができました。今回は、5件の報告と2件の誌上報告が各文化財担当者からされます。これら以外にも多くの発掘調査や建造物保存修理が実施されており、それぞれが地域の歴史を知る貴重な手がかりとなっています。本報告会を通して、少しでも文化財を身近なものとして文化財の保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会にさせていただけたら幸いです。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたり、ご協力を頂きました多くの機関、関係者の皆様へ深く感謝の意を表する次第です。

令和5年11月12日

公益財団法人 和歌山県文化財センター 理事長 櫻井敏雄

地宝のひびき —和歌山県内文化財調査報告会 2023— 開催日程・目次

開催日時 令和5年11月12日（日） 13時00分～16時50分

会場 紀の川市歴史民俗資料館 紀の川市東国分671

報告内容 (12時30分 受付開始 13時00分 開会挨拶)

13時10分	報告1「美浜町吉原遺跡の発掘調査－県下初！石積みをもつ方形周溝墓群－」……………2
	(公財)和歌山県文化財センター 川崎 雅史
13時45分	報告2「和田岩坪遺跡の発掘調査－弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路の調査－」……………4
	(公財)和歌山県文化財センター 仲原 知之
14時20分	報告1・2について質疑応答 (14時30分 休憩10分)
14時40分	報告3「太田城水攻め堤の土取り跡－太田・黒田遺跡第101次調査を中心として－」……………6
	(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪 勝則 氏
15時15分	報告4「中城跡、城の段遺跡の発掘調査について」……………9
	紀の川市教育委員会 白川 千畝 氏
15時50分	報告5「名手役所の復旧整備と旧竹房神社本殿の保存修理 －紀の川市の建造物事業を通してわかったこと－」……………12
	(公財)和歌山県文化財センター 大給 友樹
16時35分	報告3・4・5について質疑応答 (16時45分 閉会挨拶)
誌上報告	「西国分Ⅱ遺跡の確認調査－奈良時代の溝を中心に－」……………16
	岩出市教育委員会 本多 元成 氏
	「水軍領主 安宅氏が築いた城館－勝山城跡発掘調査成果－」……………18
	白浜町教育委員会 佐藤 純一 氏

1. 本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが開催した『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会 2023－』の報告資料集である。
2. 本書掲載資料の中には、正式な報告書が刊行されていないものが含まれているため、今後各資料の位置付けが変更される可能性がある。
3. 本報告会を開催するにあたり、紀の川市教育委員会及び紀の川市歴史民俗資料館をはじめ、県内各自治体の文化財関係部局・担当課等から多大なるご協力を得た。記して謝意を表す次第である。
4. 本書の編集は、田之上裕子（公益財団法人和歌山県文化財センター）が担当した。

美浜町吉原遺跡の発掘調査

— 県下初！石積みをもつ方形周溝墓群 —

(公財) 和歌山県文化財センター 川崎 雅史

1. はじめに

吉原遺跡は、日高郡美浜町吉原に所在し、日高川右岸に形成された海岸砂丘上に立地します。遺跡は砂丘稜線に沿って長さ 500m、幅 150m の範囲に展開し、これまでの調査によって、弥生時代から近世にかけての墓地であることが明らかになっています。



図 1 遺跡の位置

2. 調査成果

調査は県道の安全施設整備事業に伴うもので、令和 4 年 11 月から調査面積 369.6 m² 対象に実施しました。検出した遺構には、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓 7 基・土坑、奈良時代の火葬墓 1 基などがあります。

方形周溝墓は 004 方形周溝墓のみが弥生時代中期で、残りの 6 基 (007・011・015・023～025 方形周溝墓) が弥生時代後期末から古墳時代初頭頃と考えられます。これらのうち 011・015 方形周溝墓が墳丘裾に石積みを持ち、007・023～025 方形周溝墓が墳丘部に石積みなどの構造物があった可能性があります。

もっとも残りの良い 015 方形周溝墓は、同じ軸方向で南側に拡張を行っており、最終的な規模は墳丘部の南北方向が一辺 9.0m で、周溝は幅 1.0～1.9m、深さ約 0.15～0.35m です。西辺の中央には溝を掘り残した陸橋部が存在したことが、礫の検出状況からも窺うことができます。周溝内からは 10～20 cm の礫が多量に出土しており、基本的に墳丘側から落ち込んだ状態となりました。これらの礫を除去すると、墳丘基底部に沿うように数段分の石積みが確認でき、旧状としては墳丘裾に石積みを持ち、墳丘部に葺石（貼石）などの構造物があった可能性が考えられます。築造当初の規模は一辺 8.6m で、使用された礫は当初の方がやや大振りとなっています。遺物は検出時あるいは周溝内から、弥生時代後期末頃の土器片が出土しています。人を葬った主体部は確認できていません。

3. まとめ

吉原遺跡での方形周溝墓の築造は弥生時代中期前葉あるいは中葉にはじまります。昭和 63 年の 7 区 SX-001 と今回の 004 方形周溝墓ですが、これらは和歌山県内においても古い例とすることができます。弥生時代後期末から古墳時代初頭の方形周溝墓は昭和 63 年調査の 7 区で 3 基、今回の調査で 6 基確認されています。北西側に位置する前者は方形区画に単純に溝を巡らしたもので、南東側の後者については墳丘裾に石積みなどを有しています。また、平成 28 年度調査で確認された 029 列石状遺構（墳丘部 3.2m×2.0m）や、平成 29 年度にその隣接地の工事立会で確認された列石状遺構も今回の調査で検出した方形周溝墓と構造が同様であることから、遺跡南東部

を中心に墳丘裾に石積みなどをもつ方形周溝墓が展開していた可能性が高いといえます。墳丘裾に石積みなどの石の構造物をもつ方形周溝墓は県内では確認されておらず、似た構造のものを求めると近畿北部や山陰・播磨地方に分布する方形貼石墓があり、関連が注目されます。同じ遺跡内で少し距離を隔てて、構造の違う方形周溝墓群が存在することは、それぞれ違う集団によって造営されていることの証左と言えます。吉原遺跡の周辺には、畿内地域と同様な方形周溝墓を築く集団と近畿北部や山陰地方などと繋がりがあある集団が存在したと捉えることもできます。

石積みをもつ方形周溝墓の発見は、当地域の墓制や地域間交流を考えるうえで貴重な資料を提示したと言えます。

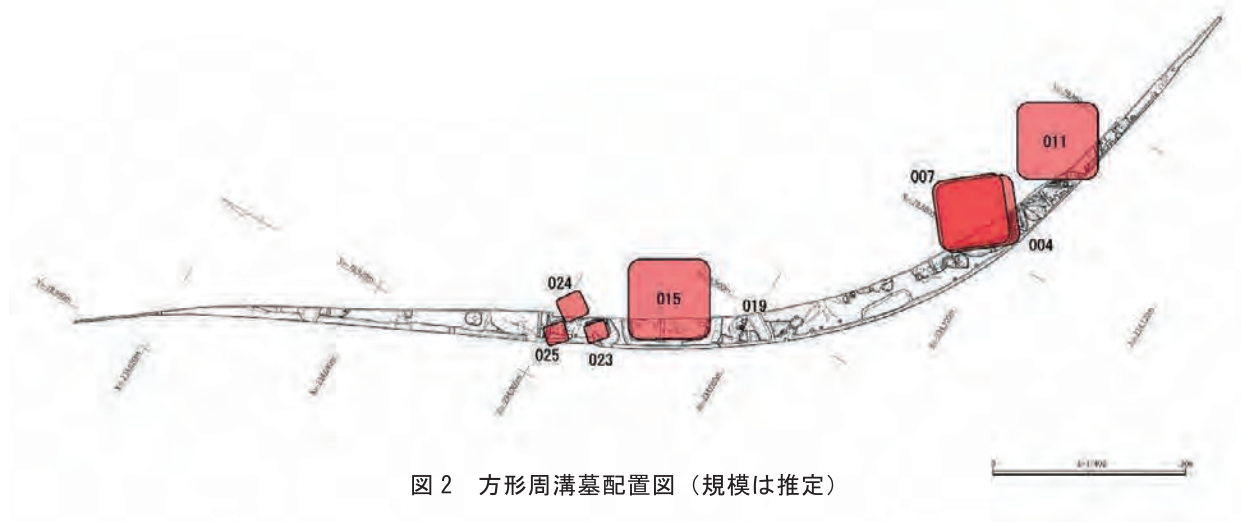


図2 方形周溝墓配置図（規模は推定）



写真1 015・023 方形周溝墓（北西から）



写真2 015 方形周溝墓（上空から）



写真3 004・007・011 方形周溝墓（上空から）

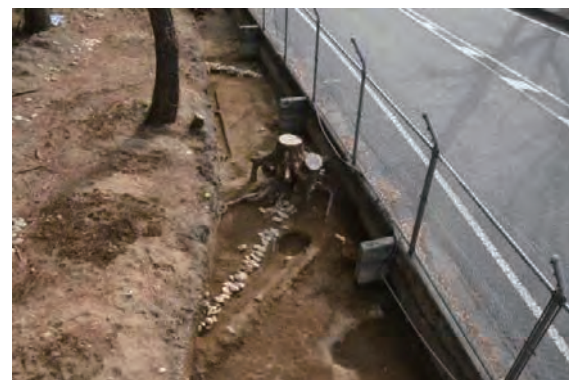


写真4 011 方形周溝墓（西から）

和田岩坪遺跡の発掘調査

— 弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路の調査 —

(公財) 和歌山県文化財センター 仲原 知之

1. はじめに

和田岩坪遺跡は、和歌山市和田に所在し、縄文海進時には湾であったと推測される和田盆地の西側縁辺部にあたり、和田盆地を西流する和田川と北流する名草川の合流点付近に位置する。また、当遺跡の北西側には和歌山平野が広がる。

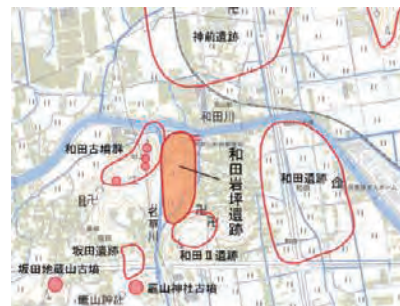


図1 和田岩坪遺跡 位置図

2. 調査成果

名草川の旧流路と考えられる自然流路跡を調査し、埋土下層から多量の弥生時代後期～古墳時代前期の土器や木質遺物（木製品・自然木・種実）が出土した。埋土最上層に初期須恵器が含まれることから、最終的に古墳時代中期に埋積したと考えられる。自然流路の西側の肩部を検出し、護岸施設と推測される石列・石敷遺構や杭列を確認した。自然流路の埋土からは土器、木製品の他、製塩土器、土錘、マダコ壺、鳥形土器、滑石製有孔円板等が出土した。

3. まとめ

今回の和田岩坪遺跡の調査地は、最終埋積が古墳時代中期となる自然流路の範囲に当たり、弥生時代後期末～古墳時代前期の土器を多量に含むことから、隣接地で当該期の大規模な集落があったと想定される。この集落では、土錘やマダコ壺、製塩土器等の漁撈・製塩関連遺物が出土し、海浜部近くに位置する集落としての生業の実態が推定できるが、木製品に農具が含まれることから農業にも従事していたと考えられる。また、水辺の祭祀に関わる可能性がある鳥形土器や滑石製有孔円板等の祭祀遺物も出土している。



写真1 航空写真（南から）

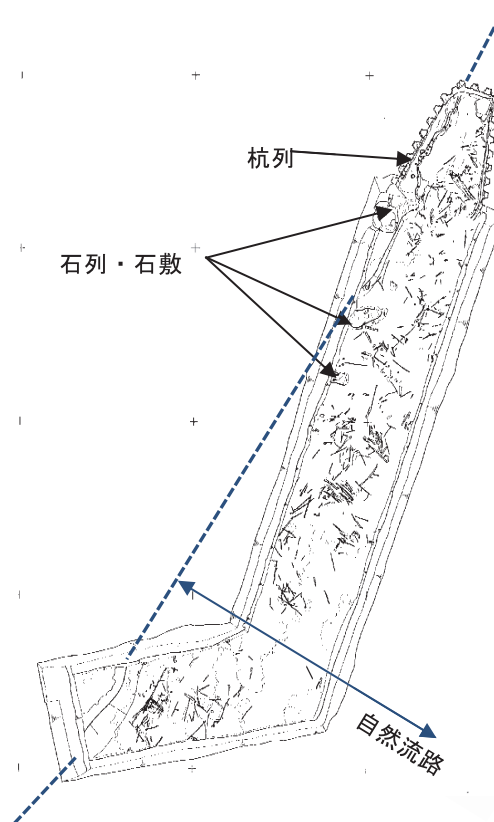


図2 調査平面図



写真2 自然流路（木質遺物出土状況）



写真3 自然流路 土層断面



写真4 自然流路肩部 石列



写真5 自然流路肩部 石敷



写真6 土師器



写真7 製塩土器



写真8 土錘



写真9 木製品（広鋏）



写真10 木製品（杭）



写真11 樹皮（素材）



写真12 鳥形土器



写真13 滑石製有孔円板



写真14 モモの種実

太田城水攻め堤の土取り跡

—太田・黒田遺跡第 101 次調査を中心として—

(公財) 和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪 勝則

1. はじめに

JR 和歌山駅の東側には、弥生時代前期から江戸時代にかけての集落遺跡である太田・黒田遺跡が広がっている。また太田・黒田遺跡の南半部には、天正 13 年（1585）に紀州を平定した羽柴秀吉によって水攻めが行われた太田城跡が含まれている（図 1・5）。

太田城の所在地や秀吉が築造した水攻め堤については、歴史地理学や文献史学からの検討、鳴神地区遺跡などの発掘調査による考古資料の調査研究により具体的な姿が復元されつつある（写真 1・2・図 2）。

今回はそのなかでも、友田町遺跡第 10 次調査や太田・黒田遺跡第 57 次調査など、水攻め堤復元ライン周辺で行われた発掘調査によって見つかった大規模な土取り穴について、太田・黒田遺跡第 101 次調査の事例を中心に紹介する（写真 3～5・図 3）。



写真 1 太田城水攻め堤（盛土 2）



写真 2 鳴神地区遺跡の堤状遺構

2. 調査成果

太田・黒田遺跡第 101 次調査では、調査区全体が室町時代後期の大規模な土取り穴のなかに位置していた（図 6、写真 6～8）。調査区の地層断面の観察をしたところ、旧地形は調査区の北西隅から南西に向かって低く傾斜し、土取りは平安時代の耕作土（褐灰色の極細粒砂混シルト）を一部掘り残しながら、標高 2.2～2.5m までをほぼ平坦に掘り込んでいた。また掘り残し部分は、幅や高さに規格性はなく畦状の高まりとして不定方向に連続するものである。その平面形状から、一部区画を示すようにみられる部分もある（写真 8）。

土取り穴には、上部に人為的に埋め戻した際のオリーブ黄色や明黄褐色のシルト～細粒砂混シルトのブロック（塊）、その下部は土取り時の掘削残土とみられる灰色や黄褐色のシルトや混極細粒砂～細粒砂のブロックが含まれる。さらに、土取り穴の底面には直径 10～50 cm の不定形な小穴が無数にみられ凸凹がある。これらは、土取り時の掘削痕跡と考えている。

3. まとめ

このような遺構は、友田町遺跡や太田城水攻め堤の復元ライン周辺の調査で見つかっている。また今回の調査では、土取り時の掘削残土から瀬戸・美濃系陶器の小片や鉛製の 2 匁鉄炮玉（8.1g）が出土し、その上部の埋土から肥前系磁器染付の小片など江戸時代以降の遺物が出土している。よって、その性格としては太田城水攻め堤構築時の土取り跡と考えられる。

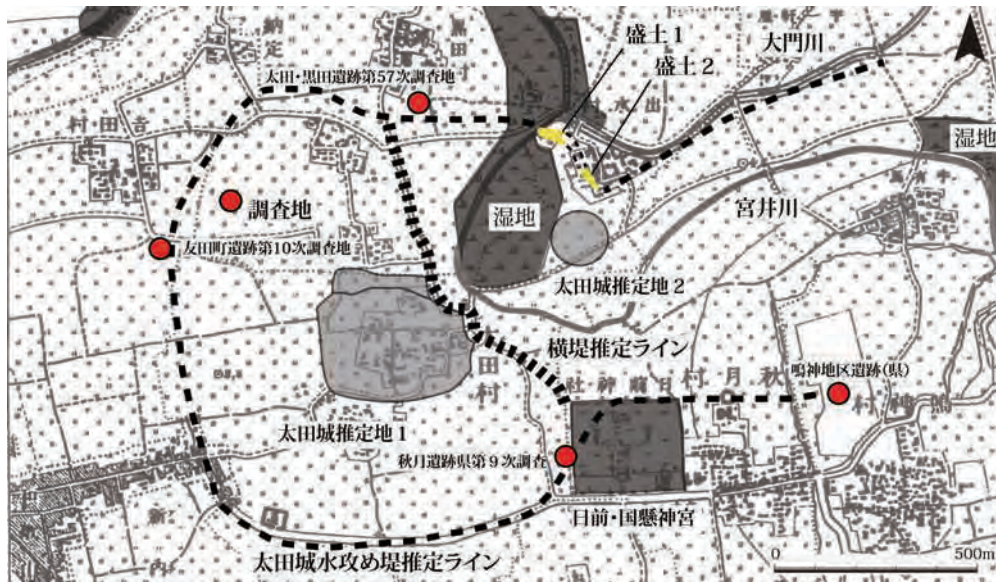


図1 太田城水攻め堤に関係する遺構が見つかった調査位置

● 赤塗り
発掘調査によって
みつかった土取り
穴と堤状遺構

● 黄塗り
現存する水攻め堤

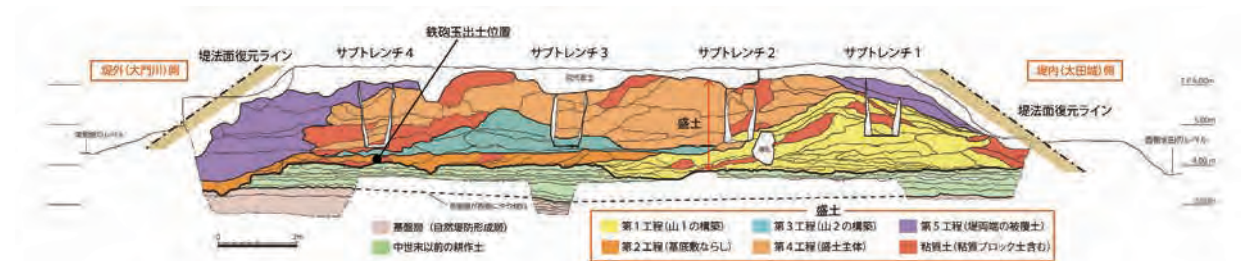


図2 太田城水攻め堤盛土工程復元図（盛土2）



写真3 太田・黒田遺跡第57次調査地層断面



写真4 友田町遺跡第10次調査地層断面



写真5 友田町遺跡第10次調査地土取り穴底面の凹凸

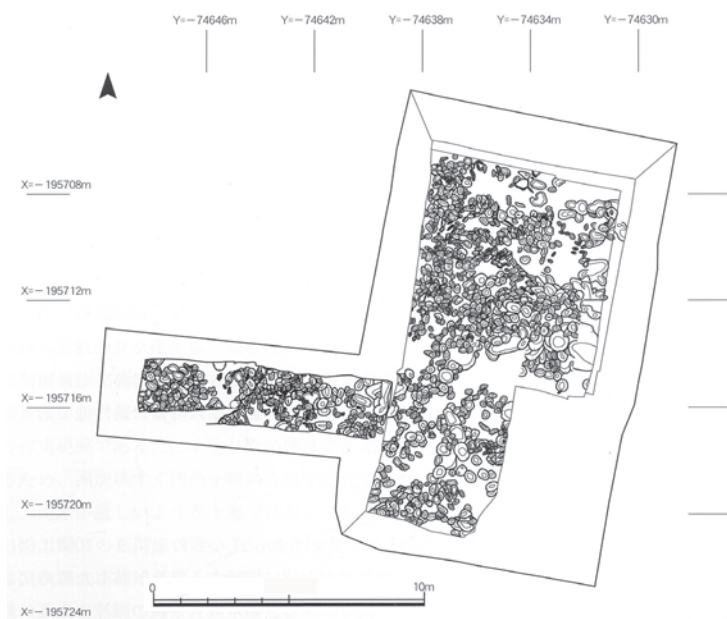


図3 友田町遺跡第10次調査土取り穴平面図



図4 友田町遺跡第10次調査土取り穴出土真鍮製小把鞘



図5 今回の調査地と既往の調査位置図

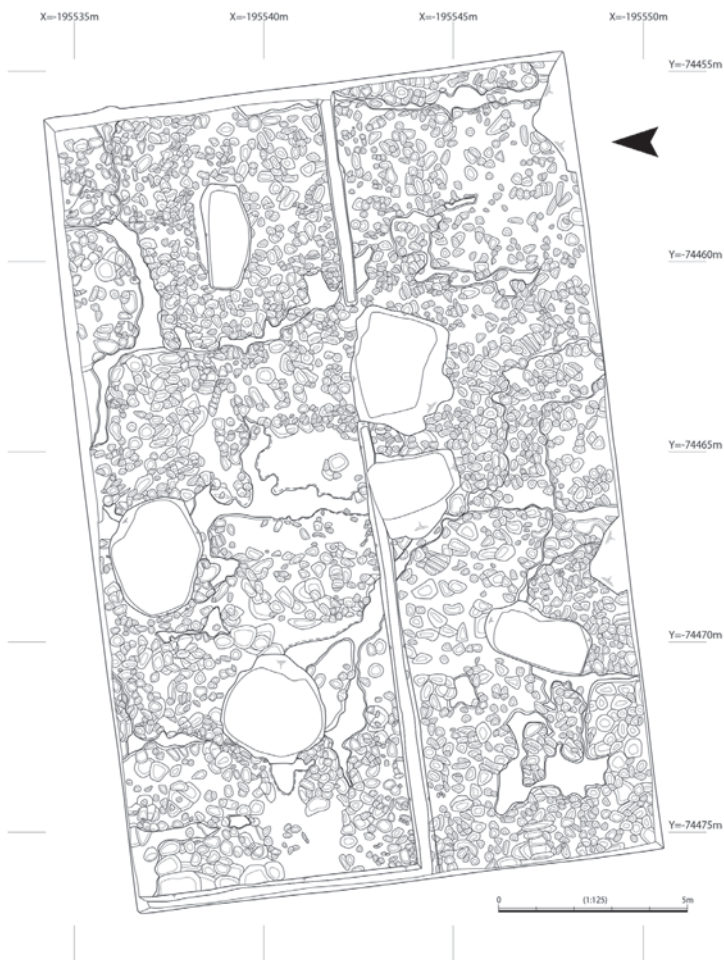


図6 太田・黒田遺跡第101次調査土取り穴平面図



写真6 太田・黒田遺跡第101次土取り穴



写真7 太田・黒田遺跡第101次土取り穴



写真8 太田・黒田遺跡第101次土取り穴 畦

中城跡、城の段遺跡の発掘調査について

紀の川市教育委員会 白川 千畝

1. はじめに

中城跡と城の段遺跡は、紀の川市桃山町調月に所在し、紀ノ川の南側の高台に位置する。中城跡は中世の城館跡、城の段遺跡は弥生時代～平安時代の集落跡として知られている。今回の調査地は、両遺跡が一部重複した場所に位置している。また、調査地内の東側には中家屋敷の堀跡と伝わる蓮池が残っており、東側隣接地は「中家屋敷跡」と推定されている。

「那賀郡誌」によると、中家は、神亀2年(725)、筑紫国から来た菅原朝臣中将送須の子孫で中世後半にこの土地に勢力をもった一族で、織田信長の紀州攻めの際に戦功があげたとされている。第39代中俊正(中勝介)には、羽柴秀吉の高野攻めから高野山を救った木食応其上人の娘、おこまが嫁いでいる。また、屋敷は豪華絢爛であったことがうかがえ、慶長3年(1598)の火災のため、古文書はほとんど焼失したと記載されている。この記載内容が事実であるかは不明であるが、今回の調査で「中家屋敷」に関係すると考えられる調査成果を確認できたので紹介しておきたい。

2. 調査成果

調査区は、図2に明示したように北側調査地に11箇所、南側調査地に2箇所設定した。

北側調査地中央部では、焼土や炭化物が混じった複数の土坑を検出した。調査区南側の土坑は大型で、16世紀後半頃と考えられる土師器皿や青磁等が出土した。また、周囲の土坑からは、同時期の軒平瓦が出土している。これらは調査地周辺で大規模な火災があり、その廃棄土坑であると考えられる。

蓮池の北側では、北側へ延長する堀跡を検出した。堀跡の幅は幅4m以上、深さ0.9m以上で、素掘りであったと考えられる。堀の埋土から、18世紀頃の染付が出土していることから、江戸時代中期以降に一部埋められたと推定できる。



図1 中城跡、城の段遺跡と周辺の遺跡



図2 調査地位置図

中世以外では、北側調査地の北西部で、弥生時代の土坑、ピット、溝状遺構を検出した。出土遺物から弥生時代中期頃と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、中家屋敷跡に関係すると考えられる遺構を確認できた。火災の廃棄土坑から16世紀後半頃の遺物が出土しており、先述の那賀郡誌で記載のあった中家屋敷の火災時期と合致する結果であった。調査地周辺の旧地形は、北側と南側が谷状に低くなっていたことから、堀跡は北側の谷まで続いている可能性がある。現況における屋敷地の有力候補地は、北側、南側及び西側より一段高い蓮池の東側の土地であるが、堀が北側に延長することから、屋敷地の広がりが見込まれる。

その他、城の段遺跡の範囲内である今回の調査地から80m東側では、弥生時代後期の竪穴建物と考えられる遺構が確認されている。調査地北側を中心とした周辺では弥生時代の集落が展開していると想定できる。

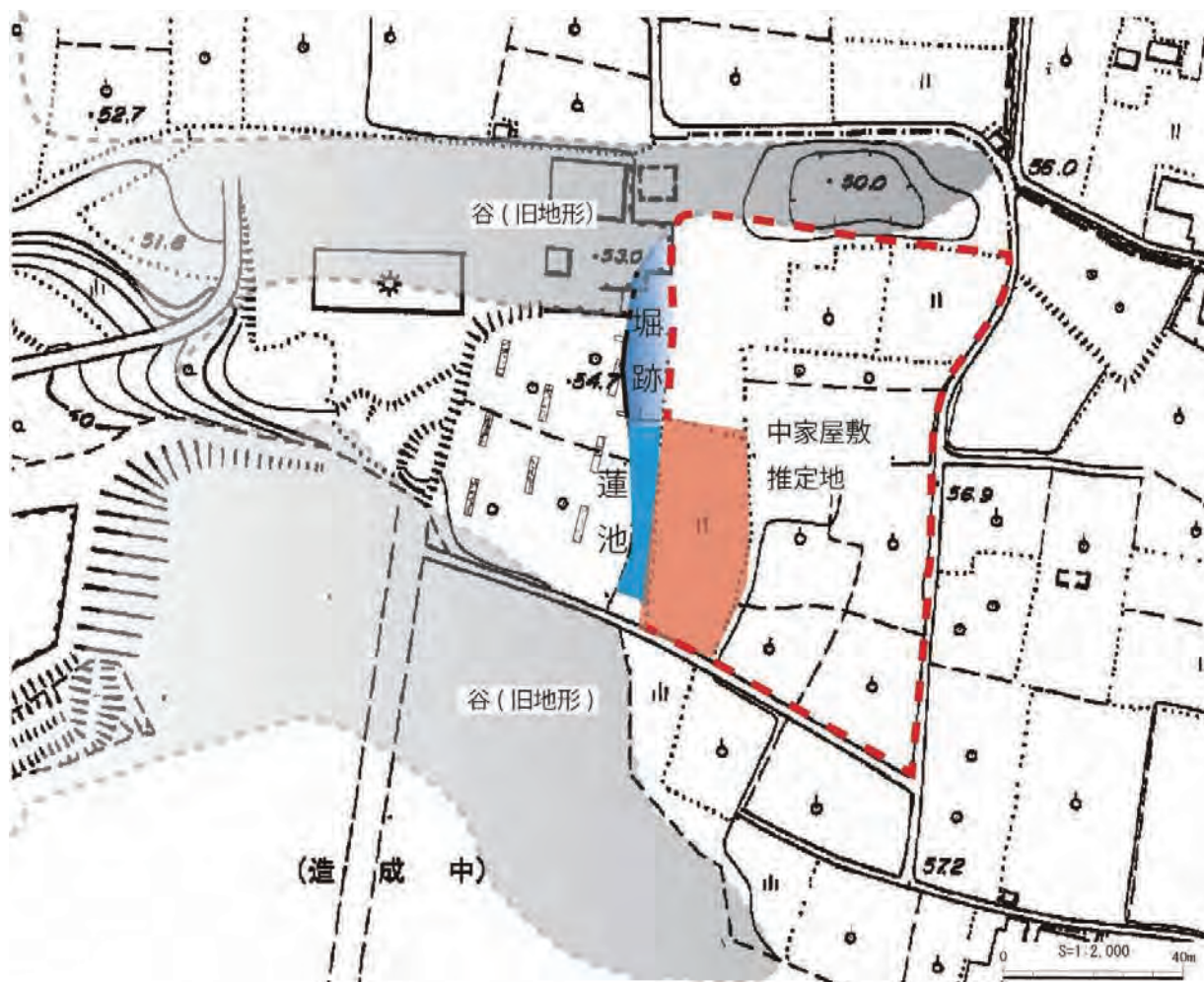


図3 中家屋敷 想定図



写真1 北側調査地全景（西から）



写真2 大型土坑 検出状況（南から）

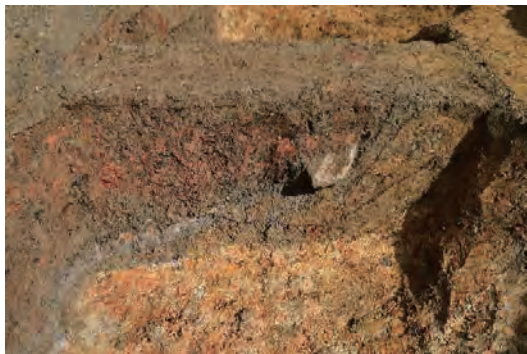


写真3 大型土坑 埋土（南から）



写真4 蓮池（南から）



写真5 蓮池北側堀跡（北から）



写真6 堀跡西肩（北東から）



写真7 中家屋敷跡推定地（南東から）



写真8 弥生土器 出土状況（東から）

名手役所の復旧整備と旧竹房神社本殿の保存修理

— 紀の川市の建造物事業を通してわかったこと —

(公財) 和歌山県文化財センター 大給 友樹

名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備工事

1. 名手役所主屋及び離れ・蔵の概要

史跡旧名手宿本陣の敷地には、中央北寄りの位置を土塀が東西に横断するように築かれており、南側は旧名手本陣妹背家住宅の主屋や蔵などが建つ敷地、北側は名手役所の敷地となっている。

本陣である妹背家住宅と、大庄屋の職務を行った名手役所が同一敷地内に総体として残っていることが全国的にも珍しく、高い評価を受けている。



写真1 名手役所主屋と離れ・蔵

記録によると名手役所は「御番所」と呼ばれる時代もあり、近年は「郡役所」の名称で知られていた。江戸期の名手組は上那賀郡に属していたが、粉河組と共に伊都郡の支配下に置かれていたようである。史料により延宝3年(1675)には存在していたことが判明するが、正徳4年(1714)の火災で類焼し、延享3年(1746)頃に主屋が再建されたことがわかっている。

主屋はその後部分的な改変を受け、天保4年(1833)に今回の事業で復旧した姿になったと考えられる(図1)。離れ・蔵の建築年代は明らかでないが、使用されていた瓦の文様などから文政期頃と推測されている。明治期には巡査派出所として使用され、その後貸家となった。

2. 事業前の状況と概要

名手役所は昭和40年から無住となっていたようで、破損が進行したため平成9年度に修理を前提とした分解工事が行われ、敷地内に仮設した倉庫に主要部材が格納されていたが、今回の事業まで再建できずにいた。本事業は史跡旧名手宿本陣整備事業の一環で、名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備工事として令和元年度より復旧作業に着手した。令和2年度に離れ・蔵、令和3年度から令和4年度に主屋の復旧整備作業が完了した。

3. 建物の特徴

主屋は東側に平屋建ての桁行三間半、梁間三間半の「東棟」と、西側に二階建ての桁行三間半、梁間二間の「西棟」が一体で建っている。しかし、実際には構造的にそれぞれ独立した架構を持ち、境界部にはそれぞれ柱が建つ。柱間が揃う箇所では二本の柱が接して並び、向かい合わせとなる面に床組や敷鴨居、貫、壁などの仕口及び風食痕が一切存在しないため、改築が繰り返されてきたことがわかる。離れは、かつて「御道具部屋」と呼ばれており、この名称から蔵に保管されていた道具や書物などを検分する場であったと推察される。

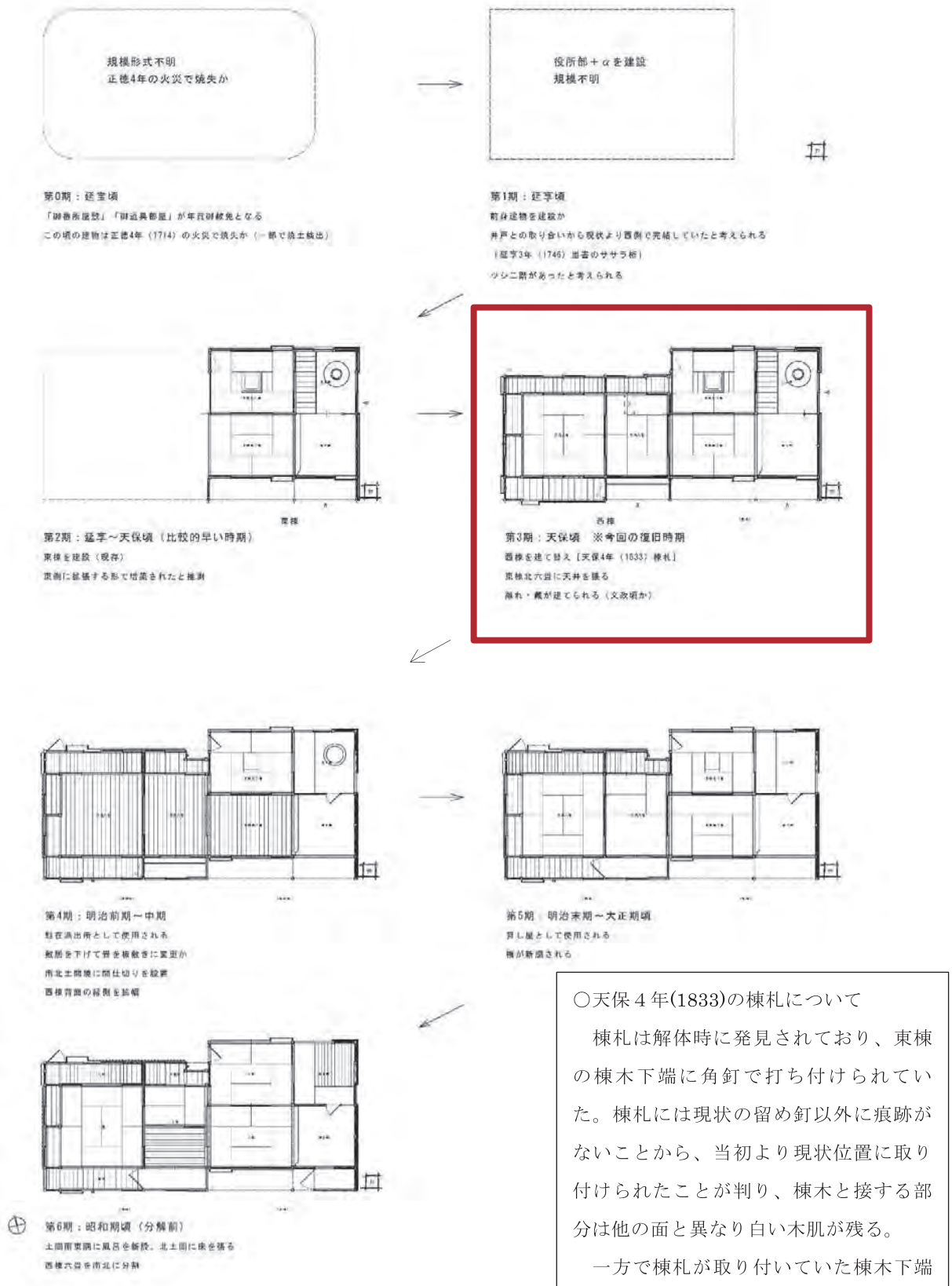


図1 名手役所主屋の変遷図

○天保4年(1833)の棟札について
棟札は解体時に発見されており、東棟の棟木下端に角釘で打ち付けられていた。棟札には現状の留め釘以外に痕跡がないことから、当初より現状位置に取り付けられたことが判り、棟木と接する部分は他の面と異なり白い木肌が残る。
一方で棟札が取り付けいていた棟木下端は黒く変色していることから、東棟が建てられた当時は棟札はなく、改築時に取り付けられたものと考えられる。

東田中神社境内社旧竹房神社本殿保存修理事業

1. 東田中神社境内社旧竹房神社本殿の概要

東田中神社境内社旧竹房神社本殿(以下、旧竹房神社本殿：写真1)は、一間社隅木入春日造の社殿で室町後期から桃山時代に建立された。この付近は中世の田中荘で、荘中に地主神が八社あり、田中の八社と呼ばれてきたが、昭和大战後、東西2カ所に集めて、それぞれ東田中神社及び西田中神社と名付けられた。今回、修理を行った旧竹房神社本殿は元々、約3キロメートル南の紀ノ川に望む台地上の竹房にあり、元来は竹房、黒土、赤尾の産土神であった建物が移築されたものである。



写真1 旧竹房神社本殿全景

2. 修理事業の概要

事業は令和4年度から2ヵ年で、屋根葺替・塗装を中心とした保存修理工事を行った。昨年度は仮設工事で素屋根を組み立て、屋根工事にて旧檜皮葺きの解体と屋根野地の補修を行い、檜皮葺きの材料調達と拵えを進めた。前回(平成元年)に屋根葺替していることもあり、野地は想定内の破損状況であった。箱棟については、勝男木上面のボルト留め部分から雨水が入り込み、腐朽が進んでいた。そのため、勝男木の取替を行い、留め穴に銅板を被せ、水の浸入を防ぐ処置を行った。今年度は主に在来の仕様で檜皮屋根を葺き上げ、縁廻りや正面千鳥破風の塗装工事、飾金具の補修等を実施した。

3. 調査報告

最も旧竹房神社本殿の特徴が表現されているのは身舎正面の意匠で、頭貫を虹梁形とし、内法長押を枕捌に納めて、鴨居との間には彫刻欄間を入れる。現在は彫刻欄間が取り外され、横板を嵌めるが(写真2)、彫刻欄間については事業中に保管されていることを確認できた(写真3)。この仕様を含めた特色について、天王寺大工の技術を基盤とした「桃山様式」が室町後期に南大



写真2 旧竹房神社本殿の身舎正面の上方



写真3 かつて身舎正面上方に入れられていた彫刻欄間（彫刻主題は菊）

阪や和歌山で成立していたとされる。身舎正面の意匠が類似する県内の社殿として重要文化財の白岩丹生神社本殿が挙げられる。旧竹房神社本殿の建築に関わった大工に関しては不明であるが、天王寺大工の作例と明らかになっている白岩丹生神社本殿との共通点をその他の彫刻類でも見つけることができた。また、同じく天王寺大工の関わりが認められる積川神社本殿(大阪府)を彫刻の特徴から、旧竹房神社本殿と白岩丹生神社本殿を結びつける存在と捉え、その三社に焦点を当て比較を行った。



左側面(後)【彫刻画題：木の葉に筆、見返しは渦文】

右側面(前)見返し【彫刻画題：葉に芋虫】

写真4 旧竹房神社本殿の主な身舎側面頭貫木鼻彫刻



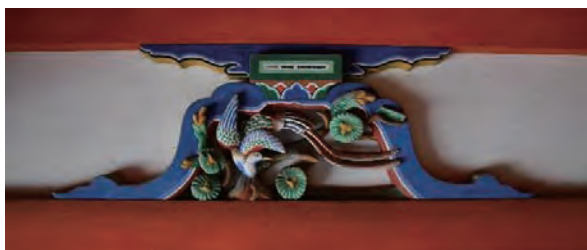
左側

右側

背面側の頭貫木鼻は、左右で先端部の形状と絵様渦の巻き方向を変えている。

そのうち、左側の先端部形状の方は白岩丹生神社、積川神社の木鼻と類似する。

写真5 旧竹房神社本殿の身舎背面側頭貫木鼻彫刻



身舎正面【彫刻画題：尾長鳥・松】



身舎左側面【彫刻画題：貝類】

写真6 旧竹房神社本殿の主な身舎墓股彫刻

西国分Ⅱ遺跡の確認調査

—奈良時代の溝を中心に—

岩出市教育委員会 本多 元成

1. はじめに

西国分Ⅱ遺跡は、和泉山脈の山麓から南の紀ノ川に向かって流れる小河川が作りだした複合扇状地が紀ノ川本流によって削られた河岸段丘上に立地している。

過去に数次の調査が実施されており、旧石器時代から室町時代にかけて断続的に続いてきている複合遺跡と理解されている。

調査地は、西国分廃寺の南約180mの地点に位置する。

また、調査地のすぐ北側は、東西にまっすぐ延びる里道に隣接している。この細い里道については、従前から南海道に比定されている。



図1 調査位置図

2. 調査成果

令和3年度の調査では、店舗建設に伴う造成工事に対する確認調査を実施した。

基本層序は、耕作土（第1層）・床土（第2層）、褐灰色土（第3層）、灰白色シルト層（第4層）、にぶい黄褐色粘質土（第5層）、黄橙色粘質土（第6層）である。

遺構としては、1～3トレンチで素堀の溝を1条検出している。

溝の幅は上辺で80～90cm、底辺で25～30cm、深さ10～23cmを測る。溝の底は平坦で、溝の埋土は褐灰色土（硬質）であった。

溝からの出土遺物は認められなかったが、第3層からは、奈良時代の須恵器や土師器・瓦の細片がごく少量出土している。

第3層からは、この時期以外の遺物は認められなかった。

検出状況を観察すると、この溝は後世における水田化の際にかなり削平を受けていることを確認することができた。

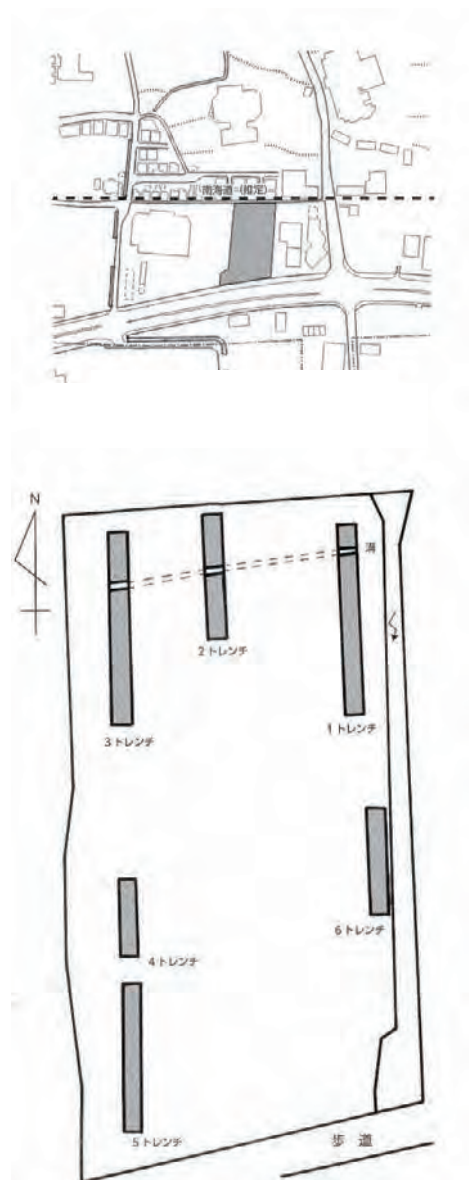


図2 調査区位置図

そのため、今回検出した溝は、溝の基底部を確認していることとなり、本来は、もう少し規模の大きな素掘りの溝であったことが想定される。

3. まとめ

いずれの溝も、現地表面（水田）から約 50 cm の深度で検出できた。溝の埋土は単層であり、一時期に埋まっていることが確認できた。

また、シルトの堆積は認められなかったことから、流水のあった溝ではなかったことも確認することができた。

検出した溝の掘り込みは、いずれの溝も、南側より北側の方がやや高かった。

溝からの出土遺物は認められなかったが、確認調査における出土遺物は、奈良時代の須恵器・土師器・瓦の細片であったことから、概ねその時期の溝と思われる。

今回検出した素掘りの溝は、調査地北側に接している里道と並行していることから、かつての道路の側溝の可能性が考えられる。

先にも触れたように、この里道は従前から南海道に推定されていることを勘案すると、今回検出した溝は、南海道の南側側溝の基底部であった可能性が考えられるのではないだろうか。

南海道に関連する研究成果に併せて、今後検討していきたい。

参考文献 岩出市教育委員会『岩出市埋蔵文化財調査年報 令和3年度』2023年10月27日

公益財団法人和歌山県文化財センター『シンポジウム南海道の原風景』発表資料集、2020年

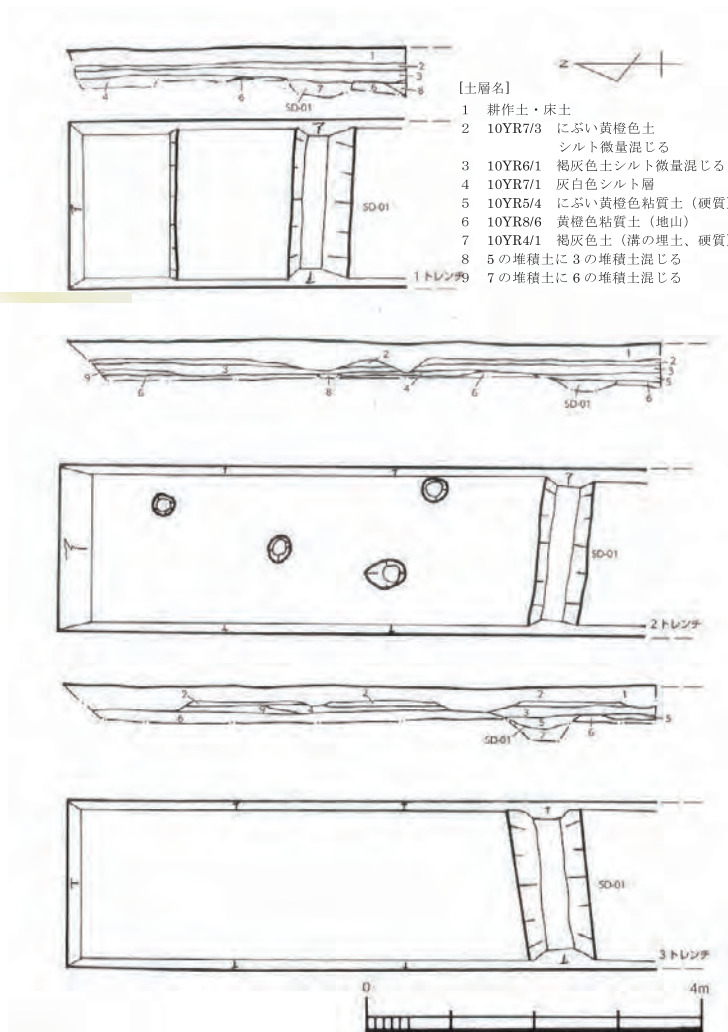


図3 1～3トレンチ平面図・土層図（東壁）



写真1 1・2・3トレンチ掘削状況（東から）



写真2 1トレンチ遺構（溝）掘削状況（西から）

水軍領主 安宅氏が築いた城館

— 勝山城跡発掘調査成果 —

白浜町教育委員会 佐藤 純一

1. はじめに

勝山城跡を含む安宅氏城館跡は、日置川下流域に集中的に築かれている点が大きな特徴である。そのうち、安宅氏居館跡（安宅本城跡）、八幡山城跡、中山城跡、土井城跡、要害山城跡の5箇所が史跡安宅氏城館跡として、国指定文化財となっている（令和2年3月10日付）。



図1 安宅氏城館跡関係城館跡 位置図

2. 調査成果

今回の調査については、史跡安宅氏城館跡の追加指定を目的とした一連の調査のひとつであり、令和4年度では、今回報告する勝山城跡を対象とした。調査面積は、約60㎡である。

1・2 tr 曲輪内部の状況を確認した。表土直下において、地山由来の礫を多く含む自然堆積層が、土塁（東）側から流れ込んだ形で厚さ20～50cm程度堆積している。自然堆積層より下は、一部に岩盤露出する地山層となる。この面を中世遺構面とみるが、遺構や整地はみられない。

1 tr 拡張部において、曲輪1の土塁を確認したが、石組等は検出されなかった。

3 tr 石組階段が検出された。以前より、最上段の石組は露出しており、その下部の構造を把握するために、設定した。当初は、土塁に直交する幅2mのトレンチを設定したが、石段は続かなかった。その後、転落石を除去しながら、一部トレンチを拡幅すると、斜めに石組が延長することがわかった。根かく乱のため、一部崩落しているが、最上段より5段目までと最下段が残存している。おそらく10～11段程度の1段2石の板石を並べた石組階段が復元できる。石段が斜行する理由は、土塁の傾斜がきついことが一因と考えられるが、さらに検討が必要である。

4 tr 虎口において、門に伴うと想定される礎石（2石）が検出された。その周囲には、原位置を移動しているものの、同様の礎石が立木に押し出されるような形で遺存し、4本の柱による門が想定される。現存する礎石間は、約180cmとなり、北西方向に長軸をもつ。門外側は、通路状となり北側へ斜め下に向けて延長するとみられる。門の軸は、曲輪の形と合致する。

5 tr 曲輪2南端の土塁は、天端部が約3mと幅広く造成されており、土塁の構造を把握するためトレンチを設定した。土塁内側は、曲輪の平坦面確保及び土塁の補強目的に3段の石積みが施されている。天端部では、土塁の形状に沿う形で柱穴が4基検出された。これは、柵列と考えられる。また、柵列の外側に、北西方向に長軸をもつ掘立柱建物が検出されている。土塁上の構造物であり、三重堀切を見下ろし、また海上まで望見できる位置にあることから、簡易的な物

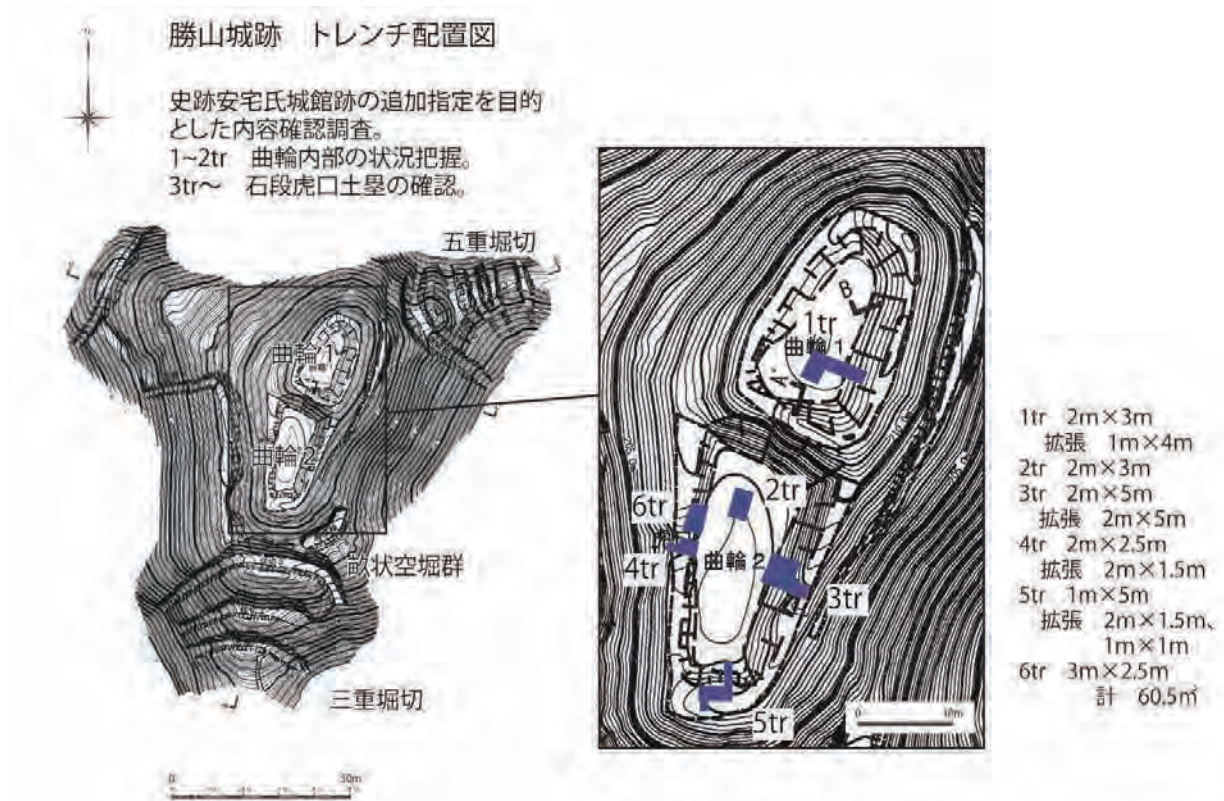


図2 トレンチ配置図



写真2 3トレンチ (石段)



写真3 4・6トレンチ (虎口周辺)



写真4 5トレンチ (土塁上柱穴跡)



写真5 青磁碗



東田中神社境内社 旧竹房神社本殿（保存修理後）



和田岩坪遺跡 鳥形土器
(弥生時代後期～古墳時代前期)

【連動企画】

「紀州のあゆみ」（和歌山県内文化財調査成果展）開催中

令和5年 11/8(水)～12/7(日)

紀の川市歴史民俗資料館展示室

主催 公益財団法人和歌山県文化財センター (<http://www.wabunse.or.jp/>)
協力 紀の川市歴史民俗資料館
後援 和歌山県教育委員会、和歌山市、紀の川市教育委員会、岩出市教育委員会、
美浜町教育委員会、白浜町教育委員会、（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団（順不同）

「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会 2023—報告資料集

発行日 令和5（2023）年11月12日

発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の1

TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270

E-mail majzou-1@wabunse.or.jp

ホームページ <http://www.wabunse.or.jp/>

印刷 初田印刷株式会社



公益財団法人
和歌山県文化財センター